



発行所
青山同窓会
 新潟市関屋下川原町二
 新潟 高校 内

印刷所 オリオン印刷機
 TEL 66-8118

近づく創立九十周年

青山同窓会会長 **鍵富清一郎**



皆さん、明けましておめでとございます。お元気で、新春を迎えられた事と喜んでおります。

母校も昭和五十七年、一九八二年には、創立九十周年を数えますので、今年あたりからそろそろ記念の計画を考えてゆかなければなりません。そのためにも若い人に、どんどん同窓会に出てもらい、盛会な会にしてゆきたいと思っております。

一九八〇年は、きびしい年といわれますが、皆さんで、がんばりましょう。

和気あいあいと 54年度総会

昭和五十四年度青山同窓会総会は、七月十四日(土)午後四時から恒例の新潟市万代橋東詰「香港」で開いた。集まるもの七百余人、東京青山同窓会からも山崎会長(当時)はじめ四人が出席した。前年病気のため無念の欠席をした鍵富会長が、ますます元気で議長席につき、五十二年度事業報告、同決算、五十四年度予算案を原案どおり可決、承認、鍵富会長、以下役員を全員再選した。このあと

根布義雄(26回)氏の首頭で乾杯懇親会に移った。

ハワイアンの子のベテラン歌手・日野野の子のアトラクションを織りまぜて和気あいあい。景品(折りたたみ式雨傘)の抽選には「おれの期は当たり方が少ない」などの声も飛び、残念というか意外というか、ステージ上で応援歌の競演まで行かぬままに予定時間到来、解散となり、それぞれに次の目的地に移動した。

「香港」での総会は昭和五十四年度総会で九回目になる。同じ会場での開催が重なるにつれて、こちらで目先を変えてどうかという意見がいろいろ出て来ている。「会場がキャバレーでは婦人同窓会が行きにくい」という強力な声もある。この機会に、なぜ「香港」を選び、継続してきたかについて説明し、今後どうするのがいかか、ご意見を求めたい。

▽「香港」選定の動機はそれまではパーティの食堂で総会を開いていたが、会場のスペースもあり、三百人前後の出席者という状況が続いていた。鍵富会長、斎藤幹事長(当時)が、「同窓会はずっと大勢集まり、懇親の実をあげるのが出発点。だと、総会の脱皮を打ち出した。目標は千人の大集会、第一歩として六百人以上。

第二は、全員座席につけること。総会出席者には高齢者が多数おいでになる。議事がある。そのためには立食形式では難があるということだった。

以上の二つの条件を満たす場所は「母校の体育館は飲食禁止である。たとえば市体育館という意見もあったが、事前、事後の設置、管理に人手がかりそうなこと(宴会業者にやらせる方法があるが、費用の問題がある)、なにより火事でも出たら責任のとりようがない、などの難点があった。結局昭和四十六年の当時、六百人以上がすわって懇親会を開ける場所は「香港」しかなかった。

▽会費・運営に会費は出来る限り安く、というのが原則。卒業年次別に会費に段階をつけるかどうかも検討したが、卒業年次についても極論すれば生活状態千差万別、会員の平等ということに落ち着いた。総会のPRと収支の掌握のために前売券方式を採用した。内実を言うと、前売券を買っていただけの方の分が、毎年大きく奇与さ

り安く、というのが原則。卒業年次別に会費に段階をつけるかどうかも検討したが、卒業年次についても極論すれば生活状態千差万別、会員の平等ということに落ち着いた。総会のPRと収支の掌握のために前売券方式を採用した。内実を言うと、前売券を買っていただけの方の分が、毎年大きく奇与さ

総合運営についてご意見を

幹事長 上村光司(50回)

「安々とキャバレー気分を味わえるのもいいじゃないか」という声があったのも事実である。会場の照明が上がらず、顔がよく見えないうと、ボックスに詰まってしまうと他の期の同窓との交流がやりにくいとの難点も聞いたが、ますますスタート時点では、「香港」を選択したのは間違いでなかったといまでも考えている。

しかし、回を重ねれば飽きも来る。とくに婦人同窓の出席に難があるとするれば、これは重大な問題であろう。総会の運営について洗直すべき時期に来ているのは事実だと思ふ。

洗直しの第一点は会場、それに関連して立食形式の可否である。現在新潟市内のホテルで最大(面積)の宴会場を持つところも、七百人全員着席は不可能と見ている。全員の立食か、あるいは壁ぎわに相当数のイスを配置しての半立食形式とすることになった場合、その得失。

第二は会費。昭和五十四年は三千円とした。前にも少し触れたが「香港」は夜の商売であり、われわれが使う場合は余分の収入になる。このため「香港」には相当無理をきいてもらって来た。ホテルの場合、そのウマ味はない。通常の立食パーティーで最低は六千円(アトラクションなし)と聞、接衝してみなければわからないが、三千円ではできないのは確実である。

ろ。どのへんまで会費を上げることが出来るか、あるいは会費にランクをつけることの可否はどうか。

もちろん、会費が三千円から五千円、六千円に上がると、それよりもムードのいい会場で、青山同窓会の品格にふさわしい総会を開くこそ基本だ、という意見もあるに違いない。「香港」では午後四時〜六時の間となり、不便かつ中途半端である、もっと良い時間帯を選べる方がいいという主張もあるはずである。

このほかにも洗直しのポイントには幾つかあると思うが、要は同窓会の発展のために、総会はどうあればよいかで、固着的な考え方は無用である。昭和五十五年度総会計画のために実行委員会を開くときの検討材料として、会員各位から率直なご意見を頂戴したい。

なお勝手ながら、ご意見整理の都合上、電話でなく、郵便でお願いしたい。あて先は、

新潟市下川原町二(〒951) 県立新潟高等学校内 青山同窓会事務局 どうかよろしく。



年頭随想

校内幹事
上杉雅之(60回)

「ドサツ」という音と共に新年が入ってきた。遠慮がちに一枚また一枚、日を追って舞い込んで来た昨年はちがいが、今年の年賀状は威勢がよかった。わが家の元旦もそれだけにひとときはぎやかだった。

▲年賀状の大半は教え子からのものである。就職の内定と、職業人としての近況報告。特徴としてあげられることは、省エネ騒動の後遺症か、大手企業はなれ、地元企業へのUターン。そして独立志向。大手をあきらめ地元金融機関に決めたA君。二年間勤めた一流企業

▲にぎやかだったといえ、イラッとした。アファガニスタン紛争で暮れた一九七〇年代最後の世界であろうか。いつてみれば、小国には小国なりの云い分があり、国には小国なりの云い分があり、張を押しつけることはできない。

▲大國アメリカを向うにまわして小国ながら石油エネルギーを握るイランは、イラン風在省エネをや、革命を成功させ大國の支配をはねつけようとしているのである。昨年、革命後のイランを訪ねた五十嵐一氏によると、「ふるあが

▲大國といえども小國をあなどれないのが八〇年代の世界だとすれば、地方へUターン、また独立して働く喜びや手造りの味を得ようとする若者が目立つのが八〇年代の日本の姿といえようか。

東京青山同窓会 総会報告

東京大手町、例のKDDのすぐ近く、農協ホール九階の十一月十六日。昭和五十四年度総会は約三百名近くの会員を迎えて六時間開会。旧会長山崎重三郎氏の離任挨拶

で始まり、新旧役員交代。新会長に南学正時氏(40)、幹事長に田中豊男氏(41)が就任、新役員紹介。山崎前会長に感謝状を贈って議事。

無事議事終了後、本部副会長から、特に若手会員参集の成果をほめた。また後、母校で講演会を開いたイラン哲学者五十嵐一氏(74)の紹介と激励の言葉。本人の挨拶があつて懇親会に移った。

昨年年度は会員名簿発行という大事業のため、開けなかったこともあり、本年度名簿完成で、連絡も徹底したのか、約三〇〇名近くがホールを埋めつくした。特に若い会員が多く、大学新入生も六名出席するという盛会ぶり。恒例と

新潟高校陸上競技部は最近十三年間連続して全国大会の出場を果

青山陸上競技 OB会総会

なっている、若手会員との交流を目的とする二次会も開かれ、先輩のなごやかな談話がその夜いつまでも続いた。



四〇〇ミリ、一六〇〇ミリを中心に、新潟県大会、北信越大会を経て全国大会へ駒を進めており、全国大会の入賞者も出している。指導してられる三浦隆

先生、宮田新太郎先生にはOB会より深く感謝の意を表したい。青山陸上競技OB会は約百二十名の組織から成り、現役選手に対し、影ながら支援しているが、OB相互も二年一回懇親会を開き親睦を計っている。

最近、組織の充実発展をのぞむ声が聞かれ、昨年十一月二十日、青山陸上競技OB会総会が「湖畔」にて開催された。約三十名のOBが参集し、現役選手の活躍の報告を聞くと同時に組織充実の案件と

強化していく方針を固めた。猶、今後、会の益々の発展を期しOB皆様のご協力をお願いいたす次第です。又、名簿、部誌の作成にかかりたいと思っております、連絡のとれていない方々も大勢いますぜひとも近況のご報告を待っています。

「連絡先」 951新潟市関屋下川原町 二丁目六三五
新潟高校陸上競技部顧問 三浦隆 先生
(72回 青海記)

昭和53年度青山同窓会収支決算書 (自昭和53年4月1日 至昭和54年3月31日)

収入の部		
科目	決算額	備考
繰越金	404,270	前年度繰越金
入会金	674,400	全日制生徒1人400円×1,347人=538,800 通信制卒業生1人1,200円×113人=135,600
会費	2,516,000	同窓会年会費1口1,000円
雑収入	4,774	預金利息
合計	3,599,444	

支出の部		
科目	決算額	備考
人件費	1,709,825	職員1人給料・手当・社会保険料
通信費	398,265	会報発送・総会・役員会・新年会案内郵便料振替料負担金
印刷費	68,240	封筒・振替用紙・字算・決算・案内状印刷代
庶務費	77,470	会員慶弔電報料・香華料・離任職員送別
退報積立金	50,000	
諸費	7,360	消耗品費等
会報印刷費	416,250	年2回発行会報印刷代
会議費	85,250	総会・新年会・役員会・会議費支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	141,250	卒業生における湯のみ代
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	140,000	通信制同窓会会費納入者1人500円280人分 通信制同窓会へ補助金として繰出
予備費	100,000	東京青山同窓会名簿補助金
合計	3,273,910	

収支差引残高 325,534 (次年度繰越)

昭和54年5月8日
上記の通り相違無いことを確認致します。

監事 福山 健
監事 沢山 巖

昭和54年度青山同窓会収支予算書 (自昭和54年4月1日 至昭和55年3月31日)

収入の部		
科目	予算額	備考
繰越金	325,000	前年度繰越金
入会金	610,000	全日制生徒1人400円×1,345人=538,000 通信制卒業生1人1,200円×60人=72,000
会費	2,400,000	同窓会年会費1口1,000円
雑収入	5,000	預金利息
合計	3,340,000	

支出の部		
科目	予算額	備考
人件費	1,760,000	職員1人給料手当・社会保険料
通信費	400,000	会報発送・総会・役員会・新年会案内郵便料振替料負担金
印刷費	70,000	封筒・振替用紙・字算・決算・案内状印刷代
庶務費	50,000	会員慶弔電報料・離任職員送別
退報積立金	50,000	
諸費	5,000	消耗品費等
会報印刷費	360,000	年2回発行会報印刷代
会議費	200,000	総会・新年会・役員会・会議費東京総会・支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	140,000	
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	125,000	通信制同窓会会費納入者1人500円250人分 通信制同窓会へ補助金として繰出
予備費	100,000	
合計	3,340,000	

東南アジアの旅

46回 高橋 是成
(県立江南高校長)



本県は青少年団体活動に携わる青年に、広い視野と国際感覚を身につけることを目的として「青年リーダー養成海外派遣事業」を実施している。このたび、団長としてタイ、インドネシア、シンガポールの三ヶ国を訪問したことを知った編集子から強い依頼があつて筆をとることになった。

ようやく朝晩の寒さを覚える十一月五日雨の新潟を二〇人の元気の青年達と出発。全員が海外は始めてという緊張の離陸もしばらくすると本土東方一五〇軒、高度九五〇〇米の放送があり雲上を一路南下す。ベトナム上空通過に続きドン・ムアン空港の気温三度と知らされざわめきがおこる。

周囲を見回して、特別外国へ来たという印象が少ないのは同じような顔や体格の人達ばかりのせいだ。鉄筋や煉瓦の建物を壊している一方、建築中のビルがやたらと目につく、道路の拡張工事が数十軒も続くといった工合に古いものからの脱皮が破壊と創造でゴチャゴチャになつていようだ。要するに何もかも変りつつある感じが強い。最初の公式訪問ユース・オクティビティ・タイ・オブ・タイランドでは青少年評議員の議長も兼ねるブン・イン国防大臣から親切に温かく迎えていただき、ご挨拶のあと質問にも答えてもらったことに一同感激する。この時の様子が翌日の新聞に写真入りで、更にテレビでも放映された。知人に会えば合掌してサワイーカー

維新の志士もかくやと思わせる強烈な愛国心を鋭い目の輝きのなかに屢々感じた。わが国の如く恵まれた環境は人間を墮落させていないだろうか。農業大学と農業高校を見学するが興農館高校で数日間勉強したという先生に会いこの国をぐっと身近に感じた。海拔二五〇米のボゴールでは雨に降られ幾分涼しくはなつたが裸で寝る我々と寒いくと震えている現地青年。一八七一年創立の広大な熱帯植物園に隣接する大統領別邸には戦時中、奈良から移した鹿が放し飼いされている。しかしホームステイで、ある団員は「あなた方は日本の戦争のイメージ

を変えたいためでしょう」と言われ驚きと困惑で一瞬は返答に窮したと報告している。

再び赤道を越えて北上「ガーデン・シティ」の別名もあるシンガポールへ到着。高層ビルの林立と豊かな緑が美しく調和している。港湾には大小無数の船があふれ、さすが世界の貿易港と感心させられた。淡路島程度の国土に新潟県



出したとの共通理解がみられる。各国の教育にかけける期待は絶大なものであった。夕食を共にする交歓会では片言の英語さえ不自由な現地青年と身ぶり手ぶりの大熱演で心を通じあい、お互いの歌、踊りを楽しむのを見てみると若者達は国境を越えて一つになったと感じた。何も分らなかつたのかも知れないが私はあの輝くばかりの太陽の国に行つた現実だけは大切にしておきたい。

Uターンの記

67回 波多野茂春
(電通新潟支局)

弟と別れて三年の後家へ還つて三日余り。本は家を出たときのまに薄く埃りを被つている。今夕食膳に供されるのは緑色の美酒。抛擲任泉(ま、よこの身は賽の目任せ)と、気意く投げ遣りに結ぶ季賀の詩が、帰郷以来三度目の寝正月を決め込む私の、属蘇気分を通り越してアルコール漬けになつた脳裡を去来する。

Uターン、Jターンが、定着した社会現象として、或いは「地方の時代」の到来を裏づけるものとしてマス・メディアに取り上げられるようになって数年。ただ、U

就職と、都合16年に亘り東京で働いた私の帰郷は、そういう新しい波に乗つたというより寧ろ偶々長男である為という類の極めて古典的なものであつた。

そんなことはともかく、十六年振りの新潟の何が私を驚かせたかと云えば、少くとも街並の変貌はそうではなかつた。

長く故郷を離れていると、そのイメージが次第に凝縮し、例えば、日本海の色と冬空の鉛色をベースに、時間的、空間的距離を失つた幼児期からの記憶のあれこれを、何の脈絡もなく焼きつけた一枚の絵のようなものが出来上る。

繰返すが、十六年振りに見た新潟、地方都市として整備が進み、旧市街を歩出ると見覚えの全くない、ずまいを見せるこの町に、そして戸惑いも覚えなかつたのは、その外観上の変貌にも拘らず、どこで私の絵と重なるものがあったからであらう。

新潟が私を驚かせし、心暖まる思いをまさせてくれたのは、もつぱらその人間の風景の多彩さによつてであつた。

二十年を隔て、の友人との出会い。街角で顔を見合せた途端、分別に覆われた仮面の下から突然現れるあの頃の顔、顔、切れていた根が一つ一つ接り、息を吹き返す人間性の輪。メガロポリスの魅力が、「匿名性」の保証と裏付けられた無機的な爽快さ、或いはその幻想であるとするれば、こゝにあるのは、それとは対照的な、濃密な地縁の人間関係の魅力とでも云えようか。

そしてもう一つ。東京で私は、コミュニケーションの手段として共通語を操らねばならず、また、そこでの極めてフィクティシヤスな状況を語る言葉として、習得した共通語は応しくもあり、必要でもあつた。新潟には新潟弁がよく似合う。こゝに私は言葉と風土がピッタリ重なり合うポジションを再発見したように思う。

54・55回 クラス会
早福 卓

卒業以来30年近く続いている同窓会の新年会が恒例により新春の一月五日昨年に引き続いて鍋茶屋で開かれた。参集した面々四十余名。

開設間もない新潟―仙台航空路で馳せ参じた中村幹男丸善仙台支店長。33年振りに東京から来港した難波秀夫(開業医)。長岡に住む中野力。富山市からわざわざ出席した岡田敏夫富山大教授等々。一年一回の顔もあり毎度の顔もありで大変な盛況振り。松ノ内の事とて若者衆の稻穂に心浮かれてか散々伍々二次会と発展して行った。亦この十五日は蒲原神社の新装成つた青海戯で再び同窓会を兼ねた「さくら会」が催された。

樋木邸収蔵美術品

観賞の記

67回 波多野茂春

内野の樋木氏が蒐集された書画、陶磁器等々を一般に公開されているという話を聞き、過日同氏邸を訪問、四代に亘る酒造りの歴史の重みを感じさせる土蔵に陳列された収蔵品の数々を見て戴いた。

陶磁は、縄文弥生の土器から、唐三彩、明・清・季朝の青・白磁、古伊万里、古九谷等々繊細・精緻優美を極め、書画は、良寛、少堀遠洲、狩野尚信等々あり。刀剣から民芸にまで及ぼうという、素人目にも壯麗なコレクションであった。

歎声を放ちつゝ、観覧すること一時間半。収集品の多彩と、一点々々の精妙・巧緻に、一同見入つた。

茶を嗜む者は、茶碗の肌の風合いに、刀剣に目の利く者は刃紋の流れに見とれ、およそ趣味などとは無縁な筆者などの眼にも、明代の青磁の清澄な碧の輝き、朝鮮のそれのくもつた灰青色、渋く豪華な赤絵、古九谷の大皿一杯に冴えた碧緑の翼を広げて翔ける大鳥黒漆に咲き出た大輪の牡丹は蒔絵の文箱か、そしてあれは、一つ一つ意匠工夫を凝らした香盒の数々等々鮮かに残っている。

「これは何か分りますか。」
樋木氏が指さしているのは、自

在鉤、糸車、煙草入れ、道中合羽などとともに陳列品の隅を占める紡錘形の藁筒であった。花活けのようにも見えるが、どうにも判らない。正解は、昔、粗塩をその中に盛つてつり下げ、ニガリを抜くのに使つたもの由。

土蔵の二層一杯に陳列してもなおスペースが足りない程の収集品の中で、この場に座り込み心行くまで眺め、対話し、思いに耽けたいと願ひ、再訪を期しつゝ、帰路についたのであった。



つた次第。

(附記) 筆者と樋木高一郎氏は青山67回卒の同期であるが、聞けば彼の父耕平氏も34回、姉美弥は65回の同窓一家である。一般の方

々の来訪も歓迎されておるのでぜひ興味のある方はお出掛け下さい。内野町の入口「鶴の友」の樋木酒造です。



新中42回同期会

同窓会名簿記載者 一三五五名
連絡可能者 一一八八名
物故者 七四名
消息不明 四三名

これが、昭和十年春卒業のわれわれである。本朴還りには盛大に思つていた矢先き、幹事吉田弘君の訃報で腰を折られ、二年の空白を余儀なくされた同期会であった。今回、新たに福田茂夫君の会社に事務局を置き、同期のつながりを強めようと、去る十一月十日



同級、田中正吾君の生家田中ホテルで、久しぶりの面々が顔をそろえることができた。

集う者三十三名。白髪あり、薄髪もあり、堂々たる老年太りに、瘦健を誇示する者と、外型は六十有余才の年輪相応ではあつても、語ることばの端々に、青陵健児の十代の片鱗をのぞかせ意気軒昂。東京の堤君、千葉の高野君、横浜の鳥羽君、仙台の小泉君の遠来組を中心に、卒業アルバムが思い出の数々を掘り起こしてくれる。

飲むほどに、語るほどに、酒量なお衰えをみせぬ強者の友は類を

在京44回クラス会

十月十八日 神宮外苑畔、『東郷記念館』に集合の檄に応じ、折からの台風情報にもめげず、小雨を衝いて同期の面々一七名踵を接し馳参じたり。

この度の集会は、在京同期生にとつて始めての催しであり、卒業以来四十年振りの邂逅の友もあり、『はて、どなたでしたか?』など尋ねる珍景もちらほら、何れも還暦の貴祿と重厚さは併せもつもの、顔に刻む皺の深さに、戦前戦後を踏み越え来りし苦勞と年輪を

呼び、その輪はひろがる。

一、貴様と俺とは、青陵健児同じ学び舎の同期生
質実剛健の 校風をうけて 鍛え抜かれた 我が友よ
二、ガンジ校長 国語はカバよ シャモもいましたガ二さんも 秋霜烈日 教えは厳し
恩師の思い出 いや深し
と、菊地幹事の替え歌に、一同声を合わせ、拍子とりつつ、今、ここに生ある歡びにひたることしばし。来年十一月の第一王曜日の再会を確認して散会。

(中野記)



- 後列左より 鳥羽正寛、倉 耕一、小山得二郎、齊藤正義
- 前列左より 松原靖一、小林暁吾、真柄浩一、広田三夫

憶う。

併しその長い四十年の空白と『ようっ』『やあ』の一言で忽ち埋まり一挙に、にきび華かなりし頃に戻る。

何れも童顔を僅かに残すとは言葉、緑なす黒髪は既に霜を混じうるの最たるは、錦織登美夫、次い

二、正寛、之に続き真柄浩一、小山得二郎、垣原高志と多士落々を誘る。変貌著しき中に昔交らぬ巨軀を誘るは齊藤伸雄一見して判別し得るのは彼のみか。

猷酬重ねるにつれ、華燭酌酒の間、懐旧談に花が咲き咲笑は爆笑を呼び、宴意々盛上る。

果ては『霞たなびく』に始まり、『強者』と次々と応援歌の大会唱となる。彼の頃は些か音痴の輩

もなきにしもあらざりけるが、今となりては、老の嘆れ声と却つて、洪みとも鏗ともとれる音聲は、神宮の森にこだます。

この日たまく、遠く南米ペルーより帰国しおられし広田三天が用務多忙をおして出席してくれしことは、錦上華を添えた感あり、彼にとつても予期せざりし友人との交歓は望外の喜びであり、又となき土産となりしならん。

飲尽きざるに定刻に至る。かくて数刻、彼に接し我に觸れ、衰歎交々胸裡に去来する中に再会を期して袂を別つ(水野記)

付記 (計画、設営に齊藤正義の努力に負う処多く、かつ新潟の小池寿哉より酒肴料をいただき誌上借り謝意を表す。敬称略)

『イラン体験』の五十嵐一氏

(74回) 母校にて講演

本校在学中から「天才」と呼ばれ、東大理学部数学科を四十五年卒業すると、同年同大大学院に入って、美学芸術学博士課程を選んで研究に励んで修了するという鬼才の五十嵐氏。五十一年イラン王立哲学アカデミーに留学。五十四年二月革命で帰国。

九月一日の朝日新聞の「日記から」で、中村真一郎(作家)に次のように紹介された。

夕方近く、ベルシヤ学者、五十嵐一氏、妻子を伴い現れる。イラン革命の動乱のなかで、テヘランに在る彼の安否を案じていたが、相変わらずの元気な顔に安心。邦人の最後の引き揚げの便で帰国したとのこと。飛び交う銃弾のあいだを、外食に通った、というような、生まなましい話。帰国早々彼もテレビに引き出されたという。

五十嵐君の置いて行った近著『イラン体験』を読みはじめ。これは、旅行者のきわ物とは異なると、イランの長い歴史と哲学伝統についての専門の学問を基礎において、現実生活の経験を語ったもので、その国民性に対する洞察には、余人の及ばぬ深さがある。

また、各所に見られる、古代文明の科学や文学への解説は、読者の知性に純粋な快楽を恵んでくれる。十一月母校の体育館で後輩に「知の風景」と題する講演会を開く。なにして専門といえるものが多い「天才」、話題は数学、美術、文

学、哲学とかめくり、「知と生」とのかかり合いを説く。とかく高次元になりやすい話題を、動乱のイランでの体験を含めてわかりやすく、約一時間熱弁をふるって聴衆を魅了した。

「いらん体験」 五十嵐一 (74回) (イラン哲学アカデミー客員)

同窓とは良いものである。在学中は顔見知りで終わっていた、或は名のみを知るの人士とも同窓ということをやっかかて親しくなるからである。

一人二人ではあっても毎年友人知巴の輪が広がっていくことは、成長する子を見るように嬉しく楽しいものである。昨秋母校を訪れて拙い話をさせて頂いたが、仲介の労をとって見たのが高校時代は遠くから仰ぎ見るのみであった生徒会長の藤田一巳君であった。

彼は現在、教育の原点は塾であるとのギリシア以来の正統な伝統に立ち帰り、プラトン同様、イデオロギアを多く食べた為か、昔てのレ

スリング部の猛者、鈴木勝紀君に会った。応援をサボルことを始め柔軟路線を専らとし、常にスネに傷もつゆえ、敬して遠ざけてきた類の御仁(失言多謝)であったが、瞬時にして親しいものを感じた。

同君は現在弁護士として正義のために闘っている。しかし何よりも五女の父という事実は脱帽に値する。三女の父はアア王で四女の場合が若草物語、では五女の父を何といわん一男一女ですら青息吐息の私に比べて、彼の姿は神々しくさえある。

両君に加えて、これは一年の時松田キノコ先生担任のクラスで共に席を並べた川口英夫、川崎昭昭の両君が出席した。学生時代すでに教授の風格ありと評された外科医の川口君、また若社長として数百人の社員的生活を支える川崎君。先の二君も加えて彼らのどつしりと腰を据えて、世の為、人の為にそれぞれの道を行く姿には、圧倒されるものがあった。

翻つてわが身を顧るに、イランくんだりまで出かけたは良いが、いらん体験しか積まぬうちに革命騒ぎで帰国を余儀なくされて了。所属していた機関は皇帝がスポンサーであったため、現在日本では無色無臭ならぬ無職有臭(イラン)で羊肉を多く食べた為か、昔てのレ

批判(クリティック)の語源が危機(クリシス)にあることから、和二十八年三月に卒業しました六十一回生にとつて二十五周年に当

の危機を生む、という話をさせて頂いたが、これは何よりも先ずわが身の置かれた状況なのである。そのような感懐を込めて、他人様から見ればいらん体験でも私にとっては懐しい「イラン体験」(東洋経済新報社)である、という書物を上梓した。お目にとまれば幸いです。

書くという産みの苦しみを味わった後の私を待っていたのは、昨秋誕生した長男と、こちらの産みの苦しみをこぞ大きければ、と居直るフサンチへの如き愚妻であった。長女との三人に占拠、包囲されてわが家はイラン以上の騒がしさである。昨日も今日も喧騒のうちに暮れてゆくが、これを乗り切るの

在京61回 同期会

去る九月十四日、残暑の夕べ、首都圏の第六十二回卒業生が東京新橋に寄り合い、語り過りました。この会は一昨昭和五十三年が、昭和二十八年三月に卒業しました六十一回生にとつて二十五周年に当

卒業20年目の 67回同期会

昨年8月11日(土)に、新潟厚生年金会館に67名の参加と恩師の阿部芳男、池政業、遠藤久雄、阿部正、高橋是成、本間正義、渡辺秀英の8先生方のご臨席をいただき、市内在住の準備委員を出して、一年がかりでの会合であった



が、消息不明の者も多かったが、それでも、全国各地からこの日のためにせせ参じた者が多数あり、幹事としては感激であった。参加者も、特に市外の方々は久しぶり同志で話はずんでいたようだ。年令も40才目前、それぞれ各方面第一線で活躍中で、変わった人あり変わらぬ人あり様々である。

り、始めて東京近辺に在住する人達で同期会を開きましたが、その折又来年もの多くの人々の声に励まされ幹事の方々の努力により催されました。当日は飯利雄一先生(理科)、斎藤浩一先生(理科)が御多忙中にも関わらず、御出席下さいました。何しろ二十六年振りの先生との再会ですので、習った生徒の方は先生のアダ名と共に昔を思い出さずは出来ても、先生の方は記憶をたどるのも大変な御様子でしたが時

間がたつにつれて当時の県高の輪郭がどんどん固つてき、そこから又話ははづみがつきました。当時若くして教鞭をとられた両先生でしたが、習った方も今や頭の薄いのが、人生の経験の深さを顔に刻んだ者で見かけは平等になりかけているのも話が親しくなるよう

した。当夜は前年に続き女性二名を含む三十二名の多くの出席を得ました。お互いしばらく語り合っているうちとどんどん昔の悪童其の面影に帰ってくるのが不思議な思いでした。我々は新制第一回の同窓であり、県高も戦後の新しい教育方針への移行期に当り、先生も生徒も変化への対応に新しい経験を積み重ねている時期でした。そんな当時の我々の知らなかつた先生の御苦労、今では時効になつた話を両先生よりお聞きし、これ又又当夜の酒の肴になりました。中でも当時の先生の御給料が七千円で下宿代が五千円であつたとか。又生徒の方も育ち盛りの空腹を浜のグミ林へ抜けて出て赤い実を口に入れて過した話など、まことに大昔の話の感でいっぱいでした。丁度年令的にも要職に就かれています。

尚、六十一回同期会の東京事務局は、左記に設けてありますのでお知らせ申し上げます。 第一西脇ビル一六五号 日本総研株) 山田充内 電話 〇三三七九一九五五

青山渋柿会

—舎監征伐の真相など語り合う—

38回 近藤 圓



既に恒例になった青山渋柿会(新中寄宿舎同人の会)は十月第候補していることもあり、十一月十七日(土)に信濃河川の田中ホテルで開催した。(阿部最高点で

新潟市在住 同窓弁護士のことなど

74回 馬場 泰

新潟市在住の弁護士は現在五十名。うち約二十名ががが同窓生である。「約」というのは同窓かど

うか判断としない方々がおられるからである。私自身新参で、よく事情に通じない。そもそも新潟の弁護士仲間と相手の出身高校(中学)を意識することは殆どないのである。従って以下の紹介記には誤りもあるかもしれない。予め寛恕を乞う次第である。

同窓の市内在住弁護士の長老は、松井道夫先生(三十一回)ではなからうか。今なおかくしやくとして若手と熱い議論をいとわぬ現役である。これに三十五回今成一郎、四十三回浅平彰美らの諸先輩が続

戦後間もなく同窓を果立って今日、市内で活発な活動をされている弁護士は多い。五十五回逢坂修造、片桐敬武、五十六回岩淵信一、伴昭彦、そして五十八回坂井照一らの諸先輩である。業務に弁護士会会務に、又種々の社会的活動に指導的立場にあり、いわば弁護士会の大黒柱。いずれも現に弁護士会長かその経験者である。因みに、新潟地方裁判所第一民事部々長山中紀行判事も五十六回の同窓生である。

下つて三十歳代後半から四十代前半は、六十二回中村洋二郎、六十四回風間士郎、六十五回斎藤彰

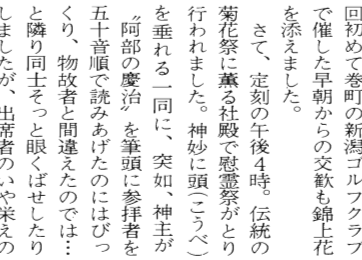
当選) 参集者は写真前列右より富所太郎(36吉田町農協中央会副会長) 武田慎二郎(35元中学校長) 吉川恒吉(36元会社々長) 渡部脩治(元母校事務官) 永井行蔵(33大学教授) 後列河内正彦(37中条町開業医) 近藤百之(相模原市元高校長) 山田利平次(36元新潟市民政部長) 丸山英二(36与板町歯科医) 近藤圓(38元中学校長)の十名。

自然五十年前の寄宿舎時代の懐旧談に花が咲く。永井教授からは有名な舎監征伐事件の一席が語られた。夜中に舎監室真上の部屋から大バケツの水をぶちあげた実行者の富所少年は停学処分の上教練教師で舎監のシヤモ(斎藤栄治大尉)宅にお預けの身となる。学校では恐いシヤモも自宅では太郎少年を我が子の如く可愛いが

つてくれたという。主謀者の永井少年は学校当局の必死の捜索にもかかわらず行方不明、舎生として預かった舎監長の責任問題まで起しかけたが、本人実は寄宿舎の屋根裏に蒲団を敷いて寝ながら読書三昧。その食事の運搬係は武田少年の役だった。小寺少年の自白で全貌がばれ、永井主謀は退学処分を宣告されたが彼少しも騒がず「出来るものならどうぞおやりなさい。私は明日から新潟毎日(日報の前身)の記者になり「新中内募物語」を連載し学校の教員間の問題等総て暴露してやります」と逆に名和校長をおどして退学は免れた。この少年共後年大学の教壇で源氏物語などもっともらしい顔で講義したり、米処新潟県の農協を牛耳る大物になるのだから面白いものである。話は尽きず次回を約して散会した。

48回 同期会

第48期の同期会は11月10日弥彦温泉(一泊)で開かれました。ことは物故同期生の慰霊祭を営もうと、越後一ノ宮・弥彦神社のお膝もとにしたわけです。参加者は26



がちの山色に紅葉が映えて秋気高く、近藤源資君のキモイりで、今月初めて巻町の新潟ゴルフクラブで催した早朝からの交歓も錦上添花を添えました。

3時間ほど、献酬で旧交を温めたり、思い思いの団らんを過ごし、フィナーレは各運動部の応援歌合戦、大橋明自常任幹事が応援歌をすみずみで覚えていた特技(?)には一同舌を巻きました。最後は、これも新顔の榊原寛君の音頭で乾杯してしめ、部屋に引き上げましたが、各部屋を歴訪しての歓談はいっ果てるとも知らず、深更まで続きました。

一夜明けると小春日和。ドライブに、旧友宅訪問に、また会合にと、それぞれのスケジュールに応じてグルグルで三々伍々ど会食し、再会を約して流れ解散しました。(都築弘記)

こうした年令別の構成は、新潟市在住弁護士五十名でみても、ほぼ同様のようである。即ち、五十二・三歳から六十二・三歳位の人

「大安吉日」と重なる、何人か出席を取り消してきた常連がいたのは残念でした。当日は降りみ降らずの空模様。深秋の弥彦連山やモジ谷は沈み

の面影がフラッシュのように蘇ります。あの顔、この顔が次々になつかしく笑いかけてきますが、卒業以来ついで逢えなかつた友の印象はいつまでも紅顔のままです。あの頃は若かつたなあといまの自分たちと比べてみて、青春の愛惜もひとしおでした。

こうした現象は弁護士だけでは

大塚進弥幹事長があいさつのと、東京などから駆けつけてくれた高松利男、安齋正、内藤啓一君ら遠来諸氏の自己紹介に始まって全員ユーモアたっぷりに近況を報告し、この夏、35年ぶりに新潟市へ帰り住んだ初顔の有磯一郎君の音頭で乾杯。今回は恩師ごとなのご都合もつかず、久方ぶりに水いらずの宴けとあつて、座はのつけから無礼講です。

一同、日頃の雑念を洗い浄められた心地で宿に入り、やがて宴会の開幕です。

期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名
飯古斎齋清菓田鳥中西畑藤本町丸森山	一 郎 一 郎 夫 郎 博 夫 三 郎 一 助 吉 郎 治 寛 成	近 近 笹 齋 嶋 真 須 田 田 花 藤 藤 細 堀 三 村 村 村 百	大 川 菊 小 三 笹 高 高 長 增 廣 廣 增 宮 正 山 木 田 渡	倉 口 地 林 桑 川 松 義 山 井 山 沢 川 山 田 木 田 渡	吾 夫 武 雄 典 義 丸 郎 治 司 功 勇 司 明 宏 豐 隆	平 吉 彰 一 介 郎 二 康 彦 二 五 夫 男 三 剛 郎	宇 勝 昭 健 六 諦 昭 健 昭 長 正 順 和 義 三 敬 三 雄 造 郎 昭 清 彦 勝 紀 登 慧 一 吉 卓 威 真 禪 剛 夫 男 郎 昭 哉 人 修 雄 雄 男 夫 行 雄	昭 正 道 雄 豊 康 一 郎 子 滋 修 介 威 子 根 広 平 碧 正 人 諒 久 彦 一 明 親 正 雄 之 久 智 博 裕 一 一 治 夫 隆 潤 耕 郎 明 博 茂 修 一 二 樹 義 三 隆 人 学 明
持 保 藤 藤 水 山 中 居 條 三 日 一 鏡 美 彬 48 回	一 郎 一 郎 夫 郎 博 夫 三 郎 一 助 吉 郎 治 寛 成	藤 藤 川 藤 岡 保 員 中 中 葉 井 井 由 貝 川 村 上 山 川 52 回	倉 口 地 林 桑 川 松 義 山 井 山 沢 川 山 田 木 田 渡	憲 信 辰 昭 德 和 一 昭 隆 隆 昌 隆 義 三 敬 三 雄 造 郎 昭 清 彦 勝 紀 登 慧 一 吉 卓 威 真 禪 剛 夫 男 郎 昭 哉 人 修 雄 雄 男 夫 行 雄	真 英 嘉 達 常 二 正 智 武 一 賢 信 守 卓 誠 文 悅 行 信 道 謙 和 慶 元 良 良 英 榮 杉 秀 知 幸 英 木 真 和 淳 伸 和 正 康 一 郎 三 健 夫 樹 三 駿 郎 彦 夫 明 夫 行 雄 一 甫 彦 毅 円 藏 郎 健 進 夫 雄 一 彦 門 世 介 吾 夫 雄	池 村 村 藤 藤 藤 藤 谷 貫 次 誠 美 健 國 晴 義 一 輝 俊 敬 市 郎 良 樹 純 博 修 律 正 淳 道 重 光 勝 正 三 直 正 一 富 浩 信 一 男 一 信 重 恒 欣 雅 尚 昌 惠 和 三 公 士 郎 明 一 彦 敬 弘 之 夫 隆 也 恒 彦 滿 夫 之 司 篤 祐 厚 郎	泉 岩 大 尾 齋 三 三 高 寺 富 藤 小 片 加 小 閣 田 田 高 中 渡 渡 矢 山 吉 田 67 回	紀 忠 弘 伴 力 雅 誠 和 朝 漢 71 回 武 知 岩 壽 絃 宗 鉄 英 一 明 俊 克 正 一 久 智 博 裕 一 一 治 夫 隆 潤 耕 郎 明 博 茂 修 一 二 樹 義 三 隆 人 学 明
一 郎 一 郎 夫 郎 博 夫 三 郎 一 助 吉 郎 治 寛 成	一 郎 一 郎 夫 郎 博 夫 三 郎 一 助 吉 郎 治 寛 成	之 夫 男 一 強 一 孝 雄 策 太 次 郎 寬 男 次 郎 仁 郎 雄 秀 豐 由 彦 一 榮 英 喬 男 八 二 吉 兒 郎 夫 隆 三 三 夫 泰 男 雄 二 昭 郎 二 助 治 夫 夫 郎 郎 一 二 一 昭 朗 行 彰 功 勳 二 等 三 二 作 昭 郎 哉 朗 起 衛 夫 春 亘 榮 男 夫 彦 助 茂	倉 口 地 林 桑 川 松 義 山 井 山 沢 川 山 田 木 田 渡	憲 信 辰 昭 德 和 一 昭 隆 隆 昌 隆 義 三 敬 三 雄 造 郎 昭 清 彦 勝 紀 登 慧 一 吉 卓 威 真 禪 剛 夫 男 郎 昭 哉 人 修 雄 雄 男 夫 行 雄	真 英 嘉 達 常 二 正 智 武 一 賢 信 守 卓 誠 文 悅 行 信 道 謙 和 慶 元 良 良 英 榮 杉 秀 知 幸 英 木 真 和 淳 伸 和 正 康 一 郎 三 健 夫 樹 三 駿 郎 彦 夫 明 夫 行 雄 一 甫 彦 毅 円 藏 郎 健 進 夫 雄 一 彦 門 世 介 吾 夫 雄	池 村 村 藤 藤 藤 藤 谷 貫 次 誠 美 健 國 晴 義 一 輝 俊 敬 市 郎 良 樹 純 博 修 律 正 淳 道 重 光 勝 正 三 直 正 一 富 浩 信 一 男 一 信 重 恒 欣 雅 尚 昌 惠 和 三 公 士 郎 明 一 彦 敬 弘 之 夫 隆 也 恒 彦 滿 夫 之 司 篤 祐 厚 郎	泉 岩 大 尾 齋 三 三 高 寺 富 藤 小 片 加 小 閣 田 田 高 中 渡 渡 矢 山 吉 田 67 回	紀 忠 弘 伴 力 雅 誠 和 朝 漢 71 回 武 知 岩 壽 絃 宗 鉄 英 一 明 俊 克 正 一 久 智 博 裕 一 一 治 夫 隆 潤 耕 郎 明 博 茂 修 一 二 樹 義 三 隆 人 学 明
一 郎 一 郎 夫 郎 博 夫 三 郎 一 助 吉 郎 治 寛 成	一 郎 一 郎 夫 郎 博 夫 三 郎 一 助 吉 郎 治 寛 成	之 夫 男 一 強 一 孝 雄 策 太 次 郎 寬 男 次 郎 仁 郎 雄 秀 豐 由 彦 一 榮 英 喬 男 八 二 吉 兒 郎 夫 隆 三 三 夫 泰 男 雄 二 昭 郎 二 助 治 夫 夫 郎 郎 一 二 一 昭 朗 行 彰 功 勳 二 等 三 二 作 昭 郎 哉 朗 起 衛 夫 春 亘 榮 男 夫 彦 助 茂	倉 口 地 林 桑 川 松 義 山 井 山 沢 川 山 田 木 田 渡	憲 信 辰 昭 德 和 一 昭 隆 隆 昌 隆 義 三 敬 三 雄 造 郎 昭 清 彦 勝 紀 登 慧 一 吉 卓 威 真 禪 剛 夫 男 郎 昭 哉 人 修 雄 雄 男 夫 行 雄	真 英 嘉 達 常 二 正 智 武 一 賢 信 守 卓 誠 文 悅 行 信 道 謙 和 慶 元 良 良 英 榮 杉 秀 知 幸 英 木 真 和 淳 伸 和 正 康 一 郎 三 健 夫 樹 三 駿 郎 彦 夫 明 夫 行 雄 一 甫 彦 毅 円 藏 郎 健 進 夫 雄 一 彦 門 世 介 吾 夫 雄	池 村 村 藤 藤 藤 藤 谷 貫 次 誠 美 健 國 晴 義 一 輝 俊 敬 市 郎 良 樹 純 博 修 律 正 淳 道 重 光 勝 正 三 直 正 一 富 浩 信 一 男 一 信 重 恒 欣 雅 尚 昌 惠 和 三 公 士 郎 明 一 彦 敬 弘 之 夫 隆 也 恒 彦 滿 夫 之 司 篤 祐 厚 郎	泉 岩 大 尾 齋 三 三 高 寺 富 藤 小 片 加 小 閣 田 田 高 中 渡 渡 矢 山 吉 田 67 回	紀 忠 弘 伴 力 雅 誠 和 朝 漢 71 回 武 知 岩 壽 絃 宗 鉄 英 一 明 俊 克 正 一 久 智 博 裕 一 一 治 夫 隆 潤 耕 郎 明 博 茂 修 一 二 樹 義 三 隆 人 学 明